

夏目漱石の漢詩と小説とのかかわり

— 『三四郎』における「雲」 —

The Relationship between Natsume Sôseki's *Kanshi*
("Chinese poems") and His Novels: the Term
"Kumo" (cloud) in "Sanshirô"

曾 秋 桂*

"Eyes, ears both forgotten, my body too is lost;
alone in the void I sing a song of white clouds"
are the last two verses of Sôseki's last *kanshi* collection. Even those scholars who hitherto emphasized Sôseki's literary "motto" *sokuten kyoshi* (to follow the Way of Heaven and forsake the self) attach great importance to these two verses. But no thorough explanation concerning their relation has been given so far.

As for 'haku un no gin' (a song of white clouds) it might very well be possible that, in addition to the technique for writing *kanshi*, "shiro" is used as an epithet before "kumo" to heighten the literary effect. Accordingly, I did not confine myself to the idea of *sokuten kyoshi* or the phrase "haku un", but examined Soseki's *kanshi* with the word "kumo" in mind. This paper presents one part of the results.

Sôseki wrote 208 *kanshi*. The use of "kumo" in his *kanshi* begins

* CHENG Chiu Kuei 広島大学社会科学部研究博士課程。論文に「夏目漱石研究—漢詩と小説とのかかわり」がある。

as scenery depiction, but as Sôseki's meditation deepens, "kumo" shifts towards a symbolic meaning. That is to say, while being conscious of the actual world, he uses "kumo" as a construct of imagination, thus seeking consolation in it and committing his aspirations to it.

It is noteworthy that "kumo" plays the same role in Sôseki's novel "Sanshiro" as it does in his *kanshi*. For Sanshirô, the main character of the novel, "kumo" is the symbol for the object of his longing, i.e. Mineko. Furthermore, through the appearance of "kumo" one can see how Sanshirô's feelings for Mineko change and deepen.

Thus in the symbol of "kumo", which stands for an object of aspiration, we can detect the point which Sôseki's *kanshi* and his novel "Sanshirô" have in common. It seems that as long as the literary genre is different, i.e., *kanshi* and the novel, their connection has not received serious consideration. By focusing on the word "kumo" it becomes clear, however, that there exists a connection between Sôseki's *kanshi* and his novels, namely, in the function of the symbol "kumo".

(一) はじめに

漱石は、かつて漢文学者を志したことがある。小説家として活躍している間も、漱石は漢詩の創作を中止していない。漱石が終生やめなかった漢詩創作が、彼の小説創作にどのようなかわりを持っているのかは、漱石論の重要なテーマであるといってよいであろう。

漱石の漢詩の最後の作品の二句である「眼耳双つながら 忘れて身も亦た失い 空中に独り唱う白雲の吟」の句だけは、従来漱石の「則天去私」を主張して

きた研究者も、思想的な観点から重視しているようである。しかし、この「白雲の吟」に限って言えば漢詩の創作技法上、色彩の効果を上げるために「白」を形容語として「雲」の前に置いて修飾した可能性も高い。そのような創作技法面から漱石の漢詩を検討した論は少ない。そこで、私は「則天去私」にこだわらず、また「白雲」にとどまらず、「雲」という言葉を最初の手掛りにして、漱石の漢詩を考察しようとした。そして、漢詩の中で「雲」が果しているのと同じような役割が、『三四郎』などの小説にも見出せることを発見した。今日の発表はその結果の一部分の報告である。

(二) 漢詩における「雲」

本題に入る前に、漱石の漢詩における「雲」について、要約しておきたいと思う。表(一)を見よう。

高木文雄氏は漱石の漢詩創作を七つの時代に分けている。^(注1) 私もそれに従うが、表(一)は、「雲」の登場する詩を七つの時期に分けて整理したものである。発表時間の関係で特に「詩の題材」の欄に示した「雲」の用いられ方に注意していただきたい。

表(一)

。漢詩における「雲」

時代	内 容	詩の題材
青年時代	1 溪南の秀竹 雲は地に垂れ 林後の老槐 風は庭に満つ	(七律五) 具象
	2 雨晴れて雲も亦た散じ 夕照 漁湾に落つ	(五絶一) 具象
	3 雲を出づる 帆影 白千點 總て在り 水天 髣髴の邊	(七絶三) 具象

青 年 時 代	4 塵懐を脱却して 百事閑に 儘遊す碧水白雲の間	(七絶二)	大自然	
	5 山僧 日高くして 猶未だ起きず 落葉 拂はず 白雲堆し	(古詩四)	具象	
	6 風は空際を行きて 亂雲飛び 雨は秋林を鎖して 倦鳥帰る	(七絶一)	具象	
	7 處處の鹿声 尋ぬれど得ず 白雲 紅葉 千山に満つ	(七絶四)	具象	
	8 白雲 蓬勃として起り 天際 蛟螭を見る	(古詩十七)	具象	
	9 雲深くして 山滅せんと欲し 天濶くして 鳥頻りに飛ぶ	(五律三)	具象	
	10 雲は鞋底従り湧き 路は帽頭白り生ず	(五律三)	具象	
	11 悠悠 帰思少く 臥して見る白雲の堆きを	(五律八)	大自然	
	12 山老いて 雲の行くこと急に 雨新にして 水の響き多し	(五律五)	具象	
	13 帰期 何んぞ意とするに足らん 去路 白雲悠たり	(五律八)	白雲の悠然さ	
	14 雲は峰面を過ぎて碎け 風は樹頭に至って鳴る	(五律五)	具象	
	15 憐れむ可し一片功名の念 亦た雲烟の被に抹殺過さる	(七絶四)	否定的な働きかけ	
	松 山 時 代	1 離愁 夢に似て 迢迢と淡く 幽思 雲と与に澹澹と間かなり	(七律三)	比喻

熊 本 時 代	1 孤愁 雲際に高く 大空 断鴻帰る	(古詩十一)	比喩(愁い→高い雲)
	2 前程 望めども見えず 漠漠として愁雲横たわる	(古詩十六)	愁い雲
	3 遐懐 何処にか寄せん 緬邈たり白雲の郷	(古詩十四)	理想郷
	4 曠懐 雲雀に随い 冲融 彼の蒼に入る	(古詩五)	名詞の一部
	5 鳥入りて雲に迹無く 魚行いて水白のずと流る	(古詩七)	自然の摂理
	6 人間 固と無事 白雲自のずから悠悠	(古詩十)	自然の摂理
	7 迢迢として此れ従り去り 前路 白雲堆し	(古詩十四)	不安(否定的な働きかけ)
	8 古意 白雲に寄せ 永懐 朱絃を撫す	(古詩十一)	ゆったりとした生活での思い)
	9 詩成り 筆を投じて 蹒跚と起てば 此の去 西天 白雲多し	(七律八)	不安・期待
大 患 期	1 寂然たる禅夢の底 窓外 白雲帰る	(五絶四)	禅との結び
	2 大空 雲動かず 終日 杳かに相い同じ	(五絶三)	閑適
	3 夜に入りて空しく疑う身は是れ骨かと 臥床 石の如く 寒雲を夢む	(七絶四)	病んだ体
	4 行くこと礪に沿いて遠からんと欲して 却って雲と与に還るを得たり	(五絶四)	閑適

大患期	5 鳥を送りて天尽くる無く 雲を見て道窮まらず	(五律六)	閑適
	6 偈を壁間に懸くるは仏を焚く意 雲を天上に見るは琴を抱く心	(七律六)	仏に傾いている 心持
『行人』の頃	1 緑雲 高さ幾尺 葉葉 清陰を畳む	(五絶一)	珊瑚樹
	2 野水 君が巷を辭し 閑雲 我が堂に入る	(五律六)	画中風景
	3 手に任せて時に揮灑すれば 雲煙 筆底に生ず	(五絶四)	絵のうまさ
	4 雲箋 響き有りて 墨痕斜めなり 好句 誰か書せん 草底の蛇	(七絶一)	短冊のこと
	5 山上の白雲 明月の夜 直ちに銀鱗と為りて仏前に來たる	(七絶三)	悟りの境地
	6 浮雲 首を回らせば尽き 明月 自のずと天心	(五絶三)	悟りの境地
『こころ』の頃	1 佇立して箒頭に雲の起こる処 半空 遙かに見る古浮図	(七絶三)	理想境のあらわれ
	2 碧落 孤雲尽き 虚明 鳥道通ず	(五絶一)	悟りの境地
	3 水を隔てて東西に住み 白雲 往きて也た還る	(五絶二)	自由自在
	4 喫茶三盃の後 雲影 窓に入りて寒し	(五絶四)	悟りの境地

『明
暗
の
頃』

- | | | | |
|----|---|-------|---------------|
| 1 | 遙かに見る半峰月を吐く色
長えに聴く一水雲より落つる声 | (七律六) | 隠逸生活 |
| 2 | 篳門杜ざさず貧しきは道なるが如く
茅屋偶たま空しくして交わりは雲に似たり | (七律四) | 淡泊たる交遊 |
| 3 | 楚夢を驚残して雲猶お暗く
呉歌を聴尽して月始めて愁う | (七律三) | 心情の反映
(暗い) |
| 4 | 終日無為 雲 岫を出で
夕陽多事 鶴 松に帰る | (七律二) | 自然の無為 |
| 5 | 淡月微雲 魚は道を楽しみ
落花芳艸 鳥は天を思う | (七律五) | 自然の無為 |
| 6 | 幽懐 竹を写せば 雲は硯に生じ
高興 蘭を画がけば 香は箋に満つ | (七律三) | 絵のうまさ |
| 7 | 紅桃 碧水 春雲の寺
暖日 和風 野霽の村 | (七律三) | 隠逸生活 |
| 8 | 細水映ずる辺り 帆は白きを露し
翠雲流るる処 塔は紅を余す | (七律四) | 自然そのもの |
| 9 | 心を雲水に託して道機尽き
夢を風塵に結びて世味長し | (七律三) | 禪に結びつくもの |
| 10 | 石門 路遠くして尋ぬるを容さず
曄日 高く懸かる雲外の林 | (七律二) | 悟りの境地 |
| 11 | 雲は閑葉を黏して雪前に静かに
風は飛花を逐ひて雨後に忙し | (七律三) | 自然そのもの |
| 12 | 遙かに断雲を望みて還た躑躅す
閑愁尽くる処 暗愁生ず | (七律七) | 愁い→雲 |
| 13 | 孤雲白き処 秋色遙かに
芳艸緑なる辺り 雨声多し | (七律七) | 自然そのもの |
| 14 | 時に水雲限り無き処を望み
蕭然として独り聴く隔林の鐘 | (七律七) | 憧れの表われ |

『 明 暗 』 の 頃	15 白雲を思う時 心始めて降り 虚影を顧りみる処 意は双を成す	(七律一)	慰めてくれる もの
	16 孤雲 影無くして 一帆去り 残雨 痕有りて 半榻沾う	(七律三)	自然そのもの
	17 王者 令有りて 争って罪を赦す 雲の如く賊を斬りて血還た清し	(七律八)	数多く
	18 孤臥独行 友朋無く 又た看る雲樹 影層層	(七律二)	具象
	19 昨日 孤雲 東に向かって去る 今朝 影を落として 溪杉に在り	(七律七)	自由自在
	20 描きて西風に到りて辞足らず 雲を看 菊を採りて東籬に在り	(七律八)	隠逸生活
	21 独り拳石を摩して雲意を摸し 時に盆梅に対し蘇心を見る	(七律三)	インスピレーション
	22 潮は大江に満ちて秋已に到り 雲は片帆に随いて望み将に除かならん	(七律四)	過去に対する懐念
	23 画竜に向かって漫りに晴を点ずるを休めよ 画竜の躍る処 妖雲横たわる	(七律二)	妖→雲
	24 笑語 何んの心ぞ 雲漠漠 喧声 幾所か 水潺潺	(七律二)	禅に結つくもの
25 自ずから笑う壺中大夢の人 雲寰縹緲として忽ち神を忘る	(七律二)	仙境への関心	
26 大岳 雲無くして 積雲に輝き 碧空 影有りて 紅桃に映ず	(七律五)	仙境への関心	
27 迢迢たり天外去雲の影 籟籟たり風中落葉の声	(七律五)	自然そのもの	
28 眼耳双つながり忘れて身も亦た失い 空中に独り唱う白雲の吟	(七律八)	理想的な境地	

青年時代の漱石は旅に出、漢詩をよく作っている。その関係で実景の「雲」が漢詩の材料となっている。すなわち、「雲」に関して言えば、具象としての「雲」を描写する所から、漱石は出発したのである。それに、漱石が旅に出て、「雲」の移り変わりの様子に注目していることは、「雲」のきわめて細かな状態に照明を当てて描写している点からも伺われる。換言すれば、既に青年時代に、漱石の「雲」に対する関心は萌していると言える。

その後、松山時代を経、熊本時代に至る。熊本時代には具象としての「雲」に止まらず、漱石はさらに「雲」を通して大自然の摂理に目を向けている。このように漱石の思索が深まるにつれて、「雲」が含んでいる意味も一層広く使われるという傾向が見られる。

熊本時代以後、漱石は十年間漢詩を作っていない。熊本時代に次いで、十年後の大患期に漢詩創作を再開している。大患期の漢詩については、何と言ってもまず、旅に出ていないにもかかわらず、漱石が「白雲」を詠んでいる点に注目したい。明らかに漱石は大患期に、目の前に見ている事実とは異なるものを漢詩で詠んだのである。しかも、それが禅とかかわっているのである。この時期に来て、最初具象としての「雲」に着目した漱石は、だんだん自己の内面、即ち禅に寄せる心持ちを見つめるようになっていく。まとめて言えば、目にした外なる具象の「雲」から、自己の内面に浮び上がる「雲」に変わってくるのであり、それがこの時期の意味深い特徴だと言えるのである。

それから『行人』の頃には、南画趣味が甦ってくると共に、「雲」を絵に結びつける表現が見られる。この時期の漢詩は南画風であることが特色だとも言える。さらに、「雲」は悟りの境地に導くものであり、漱石の憧れのものである。この点においては、大患期からの禅への関心がもっと顕著になっていると認められる。

『ころこ』の頃に入ると、「雲」の禅との結びつきが十分に確立される。禅との結びつきを深めつつあると同時に、理想郷が「雲」によって描き出されるに至っている。

『明暗』期に使われる「雲」は、自然の無為に照応して清らかな詩を求めようとする主張に結びついている。外なる具象の「雲」から、自己内面に浮び上がる「雲」への変化の面では、『明暗』期には思索の深みを掘り下げると同時に、「雲」は理想郷を象徴するものになっている。

以上のように、漱石の生涯に作られた208首の漢詩における「雲」は、風景描写から出発し、漱石の思索が深まるにつれて、象徴的なものに変化していく傾向が見られる。すなわち、現実世界を意識しながら、想像の産物である「雲」を構築し、そこに慰めを求めたり憧れの対象を託したりするようになっていくと考えられる。

(三) 『三四郎』における「雲」

小説『三四郎』は、表(一)に即して言えば、時間的には熊本時代と大患期の間に入る作品である。『三四郎』の中には、「雲」という言葉は19回現われている。そのうちの十七ヶ所は、実際に小説の場面の中に「雲」が登場する場合であり、他の二ヶ所は比喩として使われる場合である。比喩として使われている二ヶ所については、ここで考えようとしている具体的な「雲」には含めずにおきたいが、にもかかわらず、見逃せないのは、この二ヶ所の「雲」には主人公の三四郎自身にとって、感覚的にある距離が置かれているといった意味が含まれていると考えられる点である。作中に具体的に存在していない「雲」の場合でも、漱石は「雲」という言葉に独特の思い入れを持っていたことが分るであろう。

さて、小説中に具体的に登場する「雲」が描かれる十七ヶ所については、まず一つの特徴が認められる。それは三四郎と美禰子の二人の人物をめぐる場面に、「雲」がよく登場するということである。もちろん、最初に「雲」が話題になる場面では、三四郎と美禰子の間で会話が交わされるのではない。しかし、この場合でも、のちほど三四郎と美禰子との間で話題になる「雲」を導き出すための伏線としての役割が無視できないのである。従って「雲」の頻出度、ま

た「雲」の出現場面に注目すると、「雲」は三四郎と美禰子との関係に、重要な役割を担っていると推測されるのである。

(A) 「雲」が描かれることの意味

作中に「雲」がはじめて話題になるのは、三四郎が故里の知人の野々宮を訪ねての帰りに野々宮と一緒にいた時である。

青い空の静まり返った、上皮に、白い薄雲が刷毛先で掻き拂った痕の様に、筋違に長く浮いてゐる。

「あれを知っていますか」と云ふ。三四郎は仰いで半透明の雲を見た。

「あれは、みんな雪の粉ですよ。かうやって下からみると、此とも動いて居ない。然しあれで地上に起る颶風以上の速力で動いてゐるんですよ。君ラスキンを讀みましたか」三四郎は憮然として讀まないと答へた。

(P33 傍点引用者)

ここでは、野々宮の「雲」に関する発言は、いかにも物理学者らしい。三四郎はただそれを聞いている一方、自分の意見を述べていない。けれども美禰子も一緒に「雲」を見る時、こういった三四郎の態度は変化している。

美禰子は其塊を指さして云った。

「駝鳥の襟巻ボアに似てゐるでせう」

三四郎はボアと云ふ言葉を知らなかった。それで知らないと言った。美禰子は又、

「まあ」と云ったが、すぐ丁寧にボアを説明してくれた。

其時三四郎は、

「うん、あれなら知っとる」と云った。さうして、あの白い雲はみんな雪の粉で、下から見てあの位に動く以上は、颶風以上の速度でなくてはならないと、此間野々宮から聞いた通りを教へた。美禰子は

「あらさう」と云ひながら三四郎を見たが、

「雪ぢゃ詰まらないわね」と否定を許さぬ様な調子であった。

「何故です」

「何故でも、雲は雲でなくっちゃ不可ないわ。かうして遠くから眺めてる甲斐がないじゃありませんか」

(P97-98 傍点引用者)

このように、野々宮から「雲が雪の粉である」という説を聞いた三四郎は、その場では同意を示さなかったが、美禰子と一緒に「雲」を見る時、野々宮の説をそのまま受け継ぎ、美禰子に言うのである。一方、美禰子は三四郎の話を聞いた途端に、すぐ「雲は雲でなくっちゃ不可ない」と言う。

要するに、野々宮はいかにも物理学者らしく、身につけた学問を生活に応用するタイプである。それに対して、三四郎の「雲」に対する考えは、まだ纏まっていない。ただ野々宮の説に乗って美禰子に伝える役を演じたのである。これは、三四郎に思考力が乏しいというよりも、むしろ田舎から出たばかりの三四郎が他に感化されやすい若さを持っていることの表われであろう。一方、美禰子は自分と違う意見に出向っても、あくまでも自己主張のできる人である。従って「雲」に対する考え方を通して、この三人の性格がはっきり映し出されていることが分る。

のみならず、「雲」の話題は、作中人物のうち、野々宮、三四郎、美禰子の三人の間に限られていることを注意したい。病院で三四郎が美禰子に出会った場面では、「三四郎の頭の中に、女の結んでいたリボンの色が映った。そのリボンの色も質も、慥に野々宮君が兼安で買ったものと同じである。」と書かれているが、それ以来、三四郎は美禰子と野々宮との間にある恋愛関係を感じているようである。作品のドラマも、三四郎がたえず美禰子と野々宮との関係を観察するという形で展開していくのである。要するに、この三人が三角関係にあることは明瞭なのだが、そのことは、「雲」の話題が三人に限られていることからも見られるのである。

それ故に、「雲」の登場によって、三四郎の美禰子に対する恋が浮き彫りにされていると言える。この点が、すなわち小説中のある特定の場面に「雲」が

登場することの意義である。

(B) 「雲」と作品の展開

前述したように、「雲」の話題によって、三四郎が美禰子への関心を持ちはじめたことが示されたのである。その後、三四郎にとって美禰子が「雲」と一体化するところまで発展している。「雲」と美禰子が一体化されるまでには、キーワードとしての「迷へる子」を無視することができない。

二回目に三四郎と美禰子が二人きりで「雲」を見た時、美禰子は三四郎に迷子の英訳である「^{ストレイ シープ}迷へる子」を教えた。それに対して、三四郎は次のように考えている。

迷へる子といふ言葉は解た様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ此言葉を使った女の意味である。

(P 135)

引用の通り、三四郎が美禰子のために、愛の謎に巻き込まれていることが明瞭なのである。この謎を解くには、美禰子の迷へる子と署名する絵葉書が届くまでを待つしかない。

三四郎は迷へる子の何者かをすぐ悟った。のみならず、端書の裏に、迷へる子を二匹書いて、其一匹を暗に自分に見立て、呉れたのを甚だ嬉しく思った。迷へる子のなかには、美禰子のみでない。自分ももとより這入っていたのである。それが美禰子の思はくであったと見える。美禰子の使った^{ストレイ シープ}stray sheep の意味が是で漸く判然した。

(P 143)

三四郎は美禰子の「迷へる子」の一句に悩まされ、美禰子への愛に迷っている。だが、絵葉書に書いてある同じ「迷へる子」の一句で、美禰子の愛を確かめている。と同時に二匹の羊が美禰子の自分への愛の暗示だと信じ込んでいる。要するに、この段階は三四郎にとって、美禰子への愛の迷いを経て、その愛への確信、ないし美禰子の自分に対する愛に答えようとするに至る歩みと見ら

れる。

こういった前提があるので、その後、三四郎にとっての「雲」は、美禰子との一体化までに発展するのである。この点については、三四郎と友人の與次郎が借金のことについて話しています。

「さう云ふ事もあるからなあ」と與次郎が云った。三四郎には只可笑しい丈である。其外には何等の意味もない。高い月を仰いで大きな聲を出して笑った。金を返されないでも愉快である。與次郎は「笑っちゃ不可ん」と注意した。三四郎は猶可笑しくなった。

「笑わないで、よく考へて見ろ。己が金を返さなければこそ、君が美禰子さんから金を借りることが出来たんだらう」

三四郎は笑ふのを已めた。

「それで？」

「それ丈で澤山ぢゃないか。—君、あの女を愛してゐるんだらう」
與次郎は善く知ってゐる。三四郎はふんと言つて、又高い月を見た。月の側に白い雲が出た。

(P 225-226 傍点引用者)

ここで注意したいのは、三四郎が二回高い月を見るということである。一回目は、三四郎が與次郎の金が返却のできない口実を聞き、可笑しくなって、高い月を見るのである。二回目は、三四郎が美禰子を愛しているだろうという質問をされる時、返答しない代わりに、同じ月を見る動作を繰り返すばかりだといふのである。見逃せないのは、この二回目だけに限って、月の側に「白い雲」が登場していることである。このように美禰子のことと触れると同時に、「白い雲」もそれに連れて登場してくる。明らかにここまで展開してきた「雲」は、美禰子のことと重なっている。換言すれば、「雲」と美禰子が一体化され、「雲」が三四郎の憧れの対象である美禰子を象徴しているものになっている。

「雲」と美禰子の一体化は、三四郎が美禰子の結婚のことを知っても、崩されていない。次は三四郎が美禰子に金を返すために教会で待っている場面であ

る。

美禰子の聲もそのうちにある。三四郎は耳を傾けた。歌は歇んだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

(P304 傍点引用者)

引用の通り、三四郎にとっては、「雲」と美禰子は分離しがたいものである。さらに過去を回想するうち、美禰子への未練も表われる。

かつて美禰子と一所に秋の空を見た事もあった。所は廣田先生の二階であった。田端の小川の縁に座った事もあった。其時も一人ではなかった。
迷^{ストレイ}羊。迷^{ストレイ}羊。雲が羊の形をしてゐる。

(P304 傍点引用者)

前述の通り、「迷へる子」の一句で美禰子への愛に迷った三四郎は、美禰子の書いてある二匹の「迷へる子」によって、その疑惑を晴した。と共に美禰子の自分への愛を確信するようになった。美禰子の結婚を知りながら、「雲」が羊の形をしてゐるという描写を通して、三四郎の未練がまだ残っていることが示されているのであろう。そして、最後に、三四郎に美禰子への愛から目覚める機会が与えられるのは、次の場面である。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云った。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罫。四丁目の夕暮れ。迷^{ストレイ}羊。迷^{ストレイ}羊。空には高い日が明かに懸る。

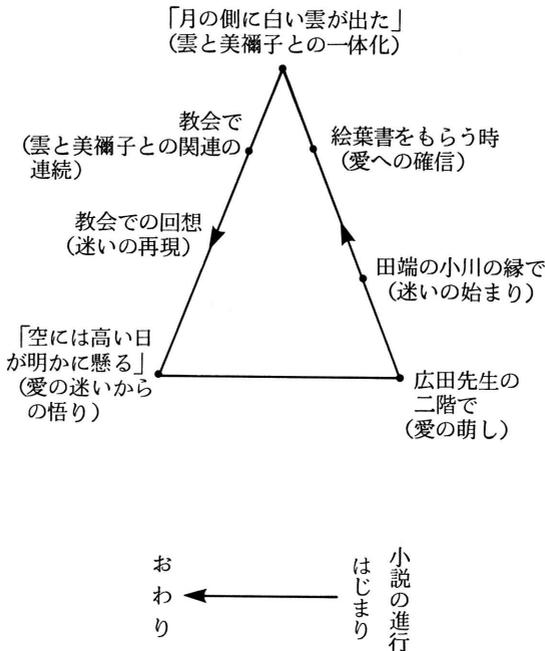
(P306 傍点引用者)

「ヘリオトロープ」は香水の名前である。かつて三四郎は夕暮れに買物に出掛ける美禰子に会い、美禰子に香水の相談を持ち掛けられた。けれども、美禰子が三四郎の勧めた「ヘリオトロープ」の香水を買わずに、ほかのものにしたということがある。^(注2) その美禰子が「ヘリオトロープ」の香水をつけ、その上自分から「ヘリオトロープ」の言葉を使ったことは、美禰子のわざとらしい、素直ではないことを裏付けているであろう。こういった点は三四郎が美禰子の謎を解く契機となる。

興味深いのは、「迷羊。迷羊。雲が羊の形をしてゐる」と「迷羊。迷羊。空には高い日が明かに懸る」の二通りの描写の対比である。この対比からは、三四郎の心情の変化が伺われる。すなわち、「雲が羊の形をしてゐる」の描写には、三四郎の美禰子への未練が見られる。それに対して、「空には高い日が明かに懸る」といように、「雲」が登場しない描写からは、三四郎の美禰子への未練が晴されていることが認められる。

以上のように、この小説では「雲」を指標として、三四郎と美禰子との関係を一貫して展開するような傾向が見られる。のみならず、「雲」の話題を、三四郎、美禰子、野々宮との三人に限っている意味は、これらの人物の三角関係を表現しようとしたものとも言える。それに加えて、この三人の「雲」に対する考え方は、三人の違った性格を説明するに足りるものである。

ところで、さらに「雲」をめぐる、三四郎の美禰子への思いを分析すると、次のピラミッドの図が形成されている。



図の通り、ピラミッドの頂点は、「雲」と美禰子との一体化の境地である。この境地に至るコースは、愛の萌しから、愛の迷いへ、そして愛への確信を経て登って来たものである。しかし、「雲」と美禰子との一体化の境地に至った途端、この道は、すぐ美禰子の結婚のために方向を変えて失望に転化するようになっている。けれども、失望に変わった三四郎の美禰子への思いは、かろうじて「雲」を通して美禰子との関連を継続させている。ところが、もう一度美禰子と「雲」を見た過去を振り返ってしまうと、美禰子への未練が再び生じ、美禰子への迷いが深まってしまう。だが、最後に、迷いの中で美禰子を再認識した上で、彼女への愛の迷いから覚めたというのである。

このように、ピラミッドの頂点に向って、上がり下がり行程は、まさしく三四郎の美禰子への愛を表示しているものである。『三四郎』における「雲」は、すなわちこの行程を進行させる役割を果し、三四郎の憧れの対象である美禰子を象徴しているものと認められる。

(四) 「雲」に関しての漢詩と『三四郎』とのかかわり

漱石の208首の漢詩のうち、69回現われた「雲」は、意味上、多様である一面を具えている。だが、実際にそれを帰納してみると、その移り変わりには、根本的な特徴が見られる。それは、具象の「雲」から象徴なる「雲」に変化していることである。すなわち、漱石の「雲」は風景描写から出発し、漱石の思索が深まるにつれて、象徴的なものに変化して行く傾向があるのである。現実世界を意識した上で、想像の産物としての「雲」を構築することは、慰めを求めたり憧れの対象を託したりする心持ちの再現である。従って、漢詩の「雲」は、漱石の思索の深みを反映した指標のような役割を果していると考えられる。漱石の憧れの対象を漢詩の「雲」に託している点は、『三四郎』の中で憧れの美禰子を象徴する所と共通している。それだけではなく、漢詩で「雲」が果した漱石の思索の深みを反映した指標としての役割は、『三四郎』でも前述したピラミッドの図のように、三四郎の美禰子への思いの変化を追う指標のような役

割を果していることと共通するのである。

以上のように、ジャンルの相違にもかかわらず、「雲」という言葉に視点をすえた考察の結果、漱石の漢詩と小説『三四郎』との間には、「雲」が象徴する表現機能の面でかかわりが存在していることが明らかになった。

今回の発表にあたっては、本研究科の藤井守先生、檜原修先生、朝倉尚先生、永尾章曹先生方に励ましの言葉をいただいたことに対して、ここに感謝の意を表したい。

[テキスト]

『漱石全集』第四巻、第十二巻 岩波書店 S50. 3. 10に基く。

[注]

1. 『漱石漢詩研究資料集』高木文雄著 名古屋大学出版会出版 S62. 2.20に参考。
2. 『漱石全集』第四巻P231に参照。

討議要旨

小林一郎氏より、「なぜ漱石は雲に注目するのか。別のものでなく『雲』である必然性はあるのか」という質問があった。発表者は「漱石の漢詩208首のうち、69首に雲が取りあげられている。これは漱石の好きな『寒山詩』とくらべてみても多い割合を示している。やはり注目に値することではなかろうか。ただ『雲』である必然性など、深い研究は今後の課題としたい。」と答えられた。小林氏は中村不折、ラスキン、『禪林句集』などの、漱石への影響をも示唆された。

糸川光樹氏から、「発表者が意図している今後の研究の方向は」との質問があり、さらに「雲」の他に、漱石を分析するキーワードはないかとの発言がなされた。発表者は、「明治期の文人と、中国人の漢詩の比較をしたい。また明治期の作家達の、漢詩の創作と小説の創作とのかかわりあいなども研究したい」と述べられた。